

千島の思出 (VI)

館 脇 操

得撫島

得撫島は長さ六二哩、幅は平均六哩で、島の内部は山岳に富み、二見山（一、三二〇米）、白瀧山（一、四二〇米）、白妙山（一、三二六米）、白旗山（一、三〇九米）得撫富士（一、三二九米）などが主なるものである。そして東端は長さ一〇軒に亘る細長に岬角状をなし、東雲ヶ原を経て島の尾崎に終つている。川には島の幅が幅だけに大なるものはない。森林は高距の低い澤沼では樹ののびは好いが、喬木林らしい喬木林はない。オホツク海面の中部なる床丹湖^{トクタ}附近の五万分の地形圖に針葉喬木の記號がうつてあるが、これはハイマツの誤認である。

私が得撫島に行つたのは昭和二年八月下旬から九月下旬である。その時には小舟港に二日、床丹附近に約三週間滞在し、プロパーの學生Nと昆虫の學生Dとの三人で感激に充ちた調査をしたものである。そして私

は中部千島に未記録な幾多の植物を採集することを得た。昭和三年八月上旬と九月中旬には新知島^{シンシム}研究の往返途上、床丹と見嶋に寄港し、昭和四年には七月下旬^{ラシヨフ}羅處和島渡航の際に見嶋に寄港し、その歸途には小舟と床丹と見嶋に寄港した。昭和五年度中部千島春季調査の際には五月中旬小舟と床丹、七月上旬見嶋と床丹に寄港した。

當時得撫島の入口ともいふべき擇捉島との間なる擇捉海峡は、いつの日も波浪が立ち勝で、船はなるべくこの海峡を避けていた。しかし旅重なる中部千島行に私も幾度かこの海峡を通過したが、船はその度毎にかなりひどく動揺した。擇捉海峡に羅針盤の針がむくと「先生氣の毒ですなえ」と、船に弱い私を、船長はなぐさめ勝に顧みたものである。しかしこの海峡こそ植物地理學上東亞溫帯と亞寒帯との境界をなす重要な線で、昭和三年私が生涯の研究の一なる宮部線を樹立したところである。この線を越すと、擇捉島まで来てい

る樹木でこの島に達しないものに、トドマツ、エゾマツ、エゾヤマナラシ、シラカンバ、ケヤマハンノキ、ミズナラ、アズキナシ、シロザクラ、ヒロハノキハダエゾイタヤなどがある。

小舟港

小舟港は得撫島太平洋岸の中部に位し、米名ポート・ハーバアーと呼ばれたところである。灣の入口にピラミッド状の岩があり、港は長さ幅共に五〇〇米位で、四〇—五〇米の斷崖にかこまれ、ポート・ハーバアーの名にふさわしい愛すべき小さな入江である。灣奥小舟川の畔に番舎が二軒あつた。地味の關係から大根や芋類の非常によくできたところで、ある年には持ちこんだ西洋苺（オランダイチゴ）が成つたとか。それをつくつた人は紅の寶玉でも得たように私達にひとくさりの物語をした。灣の清澄さ、小舟川の草々を渡る初秋の微風、中部千島第一歩上陸の感慨は、あなやおろそかのものではなかつた。私がブルー・フォックス（青狐）の放牧を見たのもこゝが始めてで、コクリ／＼と川岸に水を飲むその姿に見入らざるを得なかつた。そして思はず次の一句が野帳のはしに記された。

音たてゝ狐水飲む島の午後

潮風に澄み秋の動けり

私は海岸の斷崖から、州のほとりを丹念に調査し、更に東側の稜線から△一一〇米附近にあがつて、早くもそこに波うつハイマツの樹海に驚異の眼をはつた。そして島の脊稜山岳を望み、中部千島に立つの感一層深めた。

床丹

太平洋岸中部なる床丹は、大低の地圖にその地名が出てゐる。私、現地に行かないまでは、多少の聚落でもあるのかと思つてゐた。しかし私の行つた頃の床丹には、太平洋に面して無造作にならぶ砂丘のかげに、僅かに監視舎と番舎とが一軒づつ同じような建物が二軒と、草葺小屋のような物置が一棟あつたに過ぎない。そして床丹灣と地圖には出てゐるが、一向に灣らしいところもない曲浦である。

監視舎には中部千島に二人いる監督さんの一人が居り、番舎には二家族住んでゐた。當時の監督は麻布獸醫出の早川頼房君であつた。名前から見ると華族的であるが、江戸ツ子でしかも獨身、しかも粹な伊達者風というからには、いづれは物語の所有者である。この監督にはかつての南極の勇者白瀬翁の居られたこと

もあるそうである。この、監督傳でも書いたら小説よりも奇なる事實物語の一冊ができあがるであろう。監視舎の前には高い旗竿がありそれが、國旗掲揚ともなり、本船との旗信號所ともなつてゐる。中部千島の人達は得撫丸のことを本船と呼んでいた。本船が汽笛を鳴らしながら入ると、日の丸の旗がスル／＼と上までのぼる。その時は陸上異状なしの挨拶である。また祭日などにもこゝに日の丸がへんぼんとしていた。ひとつが悪くなると何もかも悪くなる島國根性。罪のない「日の丸」さえくさされる日もあつたが、私には幾つかの平和的な「日の丸」があり弧島得撫丸の「日の丸」などまた思い出深い一つである。

當時の隣人なる番舎の住人は、アイヌの新谷君と板垣君であつた。新谷君はなかなかの男つ振で、五尺八寸、堂々たる偉丈夫である。膂力人に優れ、かつてはラッコボートのステラーとして鳴らしたもので、なかなか喧嘩しないが、一度やると決して負けないという凄さももつていた。この新谷君が又仲々のY談の大家で、私達の暇な夜や雨つゞきの日にはよく駄べりにやつて来た。Y談の大家と書いて見たが、これは當らぬかもしれない、むしろ天真らんまんに語る思出話が、自然のY談のうまみになるのかもしれない。とも角精力

家のお女郎買の話だから、うがち過ぎる位うがつたところがあつたものである。板垣君は中部千島番人中の最好人物といわれた人で、ここでかせいでは親類を助けているという話であつた。子供が一人いて内儀さんが無類の世話女房型で、私達のところによく御馳走を持つて来てくれたもので、とりたての鮭でつくつたカマボコなど今に慮れえない珍味である。隣人達は早川君のことを「オチサン、オチサン」と呼んでいた。この二軒屋から少し離れた川寄りのところに狐を柵飼していた。こゝでは毛皮と飼料との間にいろ／＼た實驗をしていたらしい。夜などよく狐のなき聲が汐鳴のあいま／＼に聞えてきた。

床丹に滞在中、閉口したのは蚊群がある。

晝も晝だが夕方ともなれば底しれない群のうめきが聞え始まる。私達は雨の日以外は戸口にたつて、玄關（單に土間といつた方が適切である）で生のヨモギ（チシマヨモギ）を二束ばかりいぶし、眼をふき／＼戸を閉めてから家に入つた。しばらくの間刺戟にみちた香に室中が充満され、咽喉はこそばゆくえがらつぽくかきたてられた。その香がうすれた頃夕餉につき、それから流木の薪をたいて、標本の整理をしたり、閑談したりした。

床丹には長さ二軒、幅〇・三軒の床丹湖がある。床丹湖と海とは僅か長さ五〇〇米の床丹川でつながれている。この床丹川で、柵外の銀狐や青狐の餌にするため、よく刺網をかけた。私達もつれづれに刺網あげを手傳に行つたし、狐の餌のわけ前にもあづかつたものである。ウイスキーに筋子、焼酎でサクラマスの台鍋など、なかなか乙なものである。初秋ともなれば産卵の鮭が床丹川に入ろうと群來てくることもある。そして河に入り兼ねたものが砂濱にはねあがるのを見たこともあり、ボートで汀近くに行き、カギでひつかけて、ボートにまたたく間に半杯とつたこともある。

ボートの使用は禁止されていたが、床丹川から床丹湖えかけての使用は許されていた。出し風をひどく恐れて一切御法度である。ハイマツのしげみの深い山々にかこまれて白旗山を仰ぎ、Nのこくオールにまかせつゝ、水草をたずね、また湖畔の植物群落を精査した。

私達は床丹を基地として、東西三里位の間の調査を試みた。片道三里ともなると泊りかけになる。飯盒と米と味噌と万が一の用意のため若干のワカメを持ち、テントをかついで二泊三日ぐらいの研究に出かけた。

飯時ともなれば、溪に山魚、岩魚を釣り、また磯に海苔拾いをした。そして台場山に登り、温泉崎に行き、

八十崎をたつね、硫黄山の山懐に入り、またピリカモエ附近に行つた。Nは幾度か白旗山を極めようとしたが、いつも濃霧にさまたげられてしまつた。深いチシマザサの叢とハイマツのしげみは、私達に廣い地域の精査を許してくれなかつた。そのかわり床丹附近は、ことなくこゝとなく歩ける限りに歩いたものである。

温泉濱の北部でキャンプしていた時のことであるが私達三人のキャンプファイアを見て、一隻のボロ發動機船がやつてきた。幾月も髪に手入をしない山風のような猛者が二人、小さな傳馬を下して岸にやつてきた。「密獵船？」一同緊張する。早速船もろともシヤツターだけはきつておく。「こゝはどこかね」いきなり發せられた言葉がこれだつたのには驚いた。私達は船を見たるとも角一應床丹にまわしてくれるようにといいつけられていたので、五万分の地圖で現在場所を知らせ、直ちに床丹に行くよう申し傳えた。それからこちらも氣軽くなつて「どこから來たのさ」と聞いたら、ゴクリ／＼と川の水をうまそうに飲んだ二人は「勘察加からだよ。機關に故障が起きて五日許り漂流し、どこか判らなくなつたので千島えつゝかけてきたのさ。勘察加から島傳いに行けば根室だよ。造作はない。」とアツケラカンといわれたのにはこちらが參つてしま

つた。

見 嶋

見嶋というのは得撫島オコック海面東北の錨地で、獅子岩を東口に、蠟燭岩を西口におき、長さ二軒、幅二軒ばかりの港灣で、北は全く開いている。底邊にあたる海岸線は砂地で、東側の崖下に番舎が二軒あつた。こゝには寄港を利用して四度上陸の機を得た。一度などはアリユウシヤン列島の歸り。羅處和島におろしてもらうつもりでいたのが、オンネコタン海峡が濃霧の中に太平洋からオコック海にぬけたらしい。船は羅處和島の位置がどこか判らず。見嶋の沖までもつてこれ、沖合はるかに船の居場所が判然とし、見嶋の港で得撫丸に移乗させてもらつた。何が幸するか判らぬもので、この時マメ科の奔草ウルツプオウギの採集が出来たのである。こゝに船が入る時、乗船の白鼠丸が馬鹿にスマートな入港振をしたので、トウシロウの私も氣がつき、船長によつて聞いたなら「船同志のエケケツトさ」とニヤリとされた。また六月の半、チシマザクラのお花見をしたことがある。鹿兒島附近だと三月から櫻の種類によつては咲き始めるから、日本のお花見も長いものだなあと感心させられたことがある。

〔後記〕 得撫島は何回も島のまわりを廻つたので、大體地形も判つた。残念だつたのは、地獄山（一、〇一三米）、極楽山（一、二一八米）、得撫富士（一、三二九米）を背後に有する鐘灣に入港の機を逸したところである。一度は濃霧のため一度は薄暮が迫つたためである。あのすぐれた火山型をもつたところで、テントでもはつて一週間位はいたかつた。それに東雲ヶ原から鳥の尾崎に長く尾ひく島の東端なる臺地草原は、長い間の私の憧憬だつたが、幾度もその沖を通ることと終つてしまつた。また同様に島の西南端の蓬萊野から伸津崎にかけた草原、金庫灣から蓬萊野えの濕原も見事上陸のチャンスを見失つてしまつた。そして今となつては生れ變つてでもこなければ行けそうにもないところとなつてしまつた。（北海道大學教授）

